

## 第1回丹後地域における府立高校の在り方懇話会における主な意見 [概要]

### ■府立高校と地域との結びつき

- ・丹後地域には素晴らしい農地や特産物もあるが、問題は後継者である。今後は、普通科でも地元産業の在り方についての教育を行ってほしい。
- ・高校卒業後、一旦この地域を離れた後に帰ってくる人はかなり少ない。将来的に丹後での就職につながるよう、高校生段階で地元ですばらしい企業があるということを知ってもらう取組を普通科などでもカリキュラムに組み込んでほしい。また、高校の学びの中で、地元理解の促進や行政への参画といった取組ができないか。
- ・一つの市町だけで人材を確保し、就職先を斡旋することには無理がある。丹後地域全体で子どもを育て、丹後地域に帰ってきてもらうという面的な関係を重視して協議をしていく必要がある。
- ・子どもたちが夢を持って高校から次へ進むという時には、未来に向けて自分の選択ができるような仕組みが必要である。いずれはこの地域に帰ってきて、地域の産業、経済、暮らしを担ってくれる、未来を担える人材の育成についてともに考えていきたい。
- ・高校が地域に果たす役割は非常に大きい。地方創生のもと、各自治体が人口減少対策に臨んでいる中で、地域の府立学校がなくなるということは、町政の推進に水を差すことにもなる。形は変わるにしても、よりよい方向に進むことを希望したい。丹後全体でそれぞれの高校の役割や特色について考えていく必要がある。
- ・地域の活性化や交通事情など様々な状況も踏まえると、近くに高校があるということも大切である。高校は地域とともに歩み、地域に大きな役割を果たしている。規模が小さくなくても地域にとって高校は必要である。
- ・小中一貫教育のもと、小学校では中学校の先輩の姿を見て学ぶ機会が多いが、その先の高校についても手本としていきたい。地域でのボランティア活動などに中学生や高校生が積極的に参加しており、一緒に活動する中で小学生がその姿から学ぶ効果は大きい。
- ・小学生は地域の豊かな自然や多くの方々とふれあうことで、学習意欲が高まり、地域への思いも深まっていく。その気持ちがつながっていくような形での高校の在り方の検討をしてほしい。

### ■地域において求められている学びや教育環境の整備

- ・高校での専門的な学びを基礎に大学進学し、卒業後に農業を産業として位置づけた仕事で戻ってもらうことが理想である。農業が産業として成り立つような教育を高校で行ってほしい。
- ・過去の高校再編により、地域に貢献してきた職業に関する学科が廃止された。農業や林業、工業だけでなく、看護や介護などの分野も含め、今後この地域にどのような学科が必要なのかということを改めて考える必要がある。
- ・海洋高校などはまさに専門性の高い高校だが、例えば、舞鶴市にある日星高校のように、中学校卒業後に進学して看護などの資格を取れるような学科も検討してはどうか。

- ・保護者としては少子化による教育の質の低下については看過できない。少子化は歴然とした事実だが、子どもに、「この地域に生まれたから辛抱しなければいけない。」「かわいそうだね。」というようなことは言えない。また、志を持って進学をする子どももいるので、より継続的で安定的な間口を持ってほしい。
- ・高校は単に大学進学のための予備校なのかということについても考えてほしい。
- ・中学校の部活動において、体育系クラブが男子1種目、女子1種目。文化系クラブは設置できないという状況が続いた。子どもたちは何も言わなかったが、周囲の大人からは、「小さな集団で良いのか。」という意見と「地域の中から学校がなくなったらどうなるのか。」という二手の意見があった。すみ分けは難しいが、子どもたちがこれから様々なことを選択していくにあたり、希望を持って高校に行けるような環境を大人がしっかりとつくってやらなければならない。
- ・丹後地域では高校が最終の学校であり、地域に貢献し、地域の将来を担う人材を育成していくために必要な学科の設置や再編についても工夫してほしい。
- ・高校生の体力や心のことを考えると、1時間程度の通学時間であれば通学範囲ではないか。公共交通機関の確保も必要だが、スクールバスの導入や全寮制についても検討してはどうか。
- ・高校3年間で職業的な専門技術・知識を完成させ、スペシャリストを育成することが難しい分野もある。次の進路についても併せて考えながら、地域に貢献できる人材の育成を考えていくべきではないか。
- ・子どもたちにとって行きたい学校や学科があることがベストである。どうすれば一番良い形になるのか。丹後が発展するよう、我々大人がみんなでお金や知恵などを出し合う時代が来た。
- ・かつては多くの生徒が就職していたが、現在就職を希望する生徒はかなり少ないため、中学生が普通科志向になるのは当然のことである。しかし、高校卒業後、あるいは高校生が一旦出て行ってからもまた帰ってくるということに期待されているという声も数多く聞いており、丹後地域全体としてどのような職業学科が必要なのかについて、具体的に考える必要がある。
- ・小学校低学年における学力面や生活の自立面での課題が年々顕著になってきている。要因としては、困難家庭や貧困家庭が急増していることがあげられ、不安定な生活基盤を背景に、小学校における学びや育ちにまっすぐに向かいづらい子どもたちがかなり増えている。また、発達面で課題のある児童は年々増加傾向にある。さらに、困難家庭や貧困家庭を背景とする子どもたちは二次的な障害がある傾向もあり、就学前や低学年の子どもの課題がクローズアップされている。保幼小中高の学びの連続性を維持し、指導の質を高めていく中で、魅力ある高校生活や一人一人の生徒の将来目標、社会的自立に向けての方向性が見えてくるのではないか。

## ■地域において求められている学び（多様な学びの場の保障）

- ・ 中学校の特別支援学級で学ぶ生徒の多くは知的障害があるため、本来なら与謝の海支援学校に進学することになるのだが、高校に進学している生徒がほとんどである。府教育委員会の打ち出している京都式インクルーシブ教育システムをこの北部地域から具体的な形で発信するという構想の中に入れてほしい。
- ・ 分校や定時制など高校の在り方を考えるにあたっては、特別支援教育の観点も考慮してほしい。それが学びの連続性にもつながっていくと考える。
- ・ 八幡支援学校と京都八幡高校南キャンパスにおいては、様々な取組が進められている。同一敷地内にあることで、例えば、作業的な内容やスポーツや部活動などを通して共に学ぶなど、様々な展開が考えられる。高校のことだけではなく、特別支援教育の観点や与謝の海支援学校の移転のことも含めて検討してほしい。
- ・ 高校は適格者主義のもと、その学校で学べる能力のある子たちを入学者選抜等を経て受け入れるべきであるが、定員が充たない状況や保護者の希望などもあり、現在の分校には様々な課題のある生徒が入学している。中には知的障害の生徒もあり、指導にはかなり苦慮している。そうした課題なども検証しながら、高校としての教育の在り方全体として考えていく必要がある。
- ・ かつて伊根分校には町内あるいは橋北地域の生徒の多くが通学していたが、最近では地域からの入学生はほとんどいない。宮津・与謝地域にも定時制高校は必要であり、伊根分校が存続されるのであれば全面改築してほしい。改築ができないのであれば、伊根町でなくても良いので、通学に十分配慮した上で、一市二町のどこかに分校機能を果たし得る同等の施設を確保してほしい。
- ・ 専門的な学びや多様な学びの提供については様々な工夫ができると思う。特に多様な学びについては、例えば、5年間の高校教育もあってもいいのではないか。

## ■他地域から生徒を呼び込む方策

- ・ この地域に魅力を感じ、海洋高校のように他地域から来てもらえるような高校ができないか。他地域から来てみたくなる高校や学科についての議論も大切である。
- ・ 例えば、地域に住む祖父母のもとに孫と一緒に住んで地域の高校に通うことを認めるなどして、生徒を増やす努力をする必要があるのではないか。

## ■新しいタイプの高校の設置

- ・ 職業に関する学科の単独校を設置し、専門的な知識を身につけて社会に送り出したり、大学等に進学した後に戻ってくるような体制を創ってほしい。
- ・ 府立清明高校に見学に行ったが、すばらしい教育が行われており、大変羨ましかった。北部地域にもこういう高校があればと思う。南部地域で進められている様々な取組や、国際的なコースなど他地域からでも丹後地域で学んでみたいと思うようなコースを設置するなど、子どもたちに多様な教育機会を提供してほしい。

## ■中学生の進路選択

- ・15歳で強い志を持って高校を選んでいる子はそれほどいない。高校に入ってから柔軟にカリキュラムが選べるようなシステムが理想ではないかと思う。また、専門的な学科を選んだ生徒についても、いろいろな選択肢があるようなカリキュラムがあった方がよい。
- ・すべての中学校3年生が高校の教育内容や専門学科の内容をしっかりと理解できているわけではない。目的を持って学科や高校を選択する生徒もいるが、全体としては普通科志向が強い。高校に入学してからコースなどを選択できることが望ましい。
- ・次年度の中学校3年生は900名台と今年度と比べて約180名減少する。「こんな状況なら勉強しなくても高校に入れる。」と生徒が思うようなことだけは避けたい。高校入学だけが目的ではないが、確かな学力や将来にわたって学習する力をつけることが中学校教育の目標である。
- ・中学校卒業生に対する求人はなく、縁故就職などを除けば、すべての生徒が進学を考えなければならない。自分の将来を見据えて高校選択を考えている生徒が少ない中、この地域は交通面が必ずしも便利でないため、通学可能な範囲で高校を選ぶ生徒が多いのではないかと感じている。
- ・保護者の立場からすると、できれば高校までは自転車やバスで通える高校に通わせたい。ただ、近くの高校に入りたい学科があるかどうかという点は課題である。通学面から選択できる学科がある程度絞られるため、普通科志向になるのではないか。

## ■教育の質を確保していくための学校規模・学校再編の考え方

- ・高校が地域からなくなると地域の活気がなくなるのではと危惧するが、一方で、少ない生徒数で高校を存続することは高校の活性化としてはどうなのかも思う。
- ・少人数で目配りや気配りができる京都式の定数配置を行うなど、例えば、全国区になっても安心して進学させられる体制づくりが必要である。3学級は最低確保するというのではなく、できるだけコンパクトに再編し、少人数指導などの工夫をしてもらいたい。
- ・各地域の高校の歴史や伝統はそれぞれすばらしく、その地域から高校がなくなるとは考えられないかもしれないが、今後の中学校卒業生徒数の推計を踏まえると、丹後地域全体を見て普通科や専門学科の数などを整理する必要があるのではないか。
- ・生徒の急減期における教育改革や入試制度の見直しの評価を検証してみることも必要である。今後の子どもの数を踏まえると、募集定員を減らして各高校が生き残っていくという形ではなく、高校を整理していく必要があるのではないか。
- ・意欲的に頑張れる目標があり、意識できる良きライバルが近くにいる時に人は育つ。例えば、1学級40名の学校で1番であっても、4学級160名の学校には自分と同じレベルの子が少なくとも4人はいる。そこでの意識と頑張りが人を伸ばす。前に一步踏み出す力やチームで協力する力などを身につけた人が産業界に数%でも増えれば、その産業でもっと有益な事業ができ、日本に利益が増えると考えれば、高校には一定の生徒数の規模が不可欠だということになる。

- ・ 社会人基礎力や人との関わりで培われる様々な貴重な力を身に付けさせ、本府を支える人材を育成するためには学年4学級160名は必要である。この規模なら様々なクラブが設置でき、1クラブに所属する生徒数も一定確保できるので、その中で揉まれて育っていける。4学級が無理なら少なくとも3学級120名程度であればと思う。高校を整理して、集団で活動し、ライバルと競い合うことが可能な環境にすることが、この地域を支える人材の育成につながるのではないか。
- ・ 様々な学校教育活動を充実させるためには、個人的な教員の指導力だけではうまくいかない。教員がチームを組み、各教員の特性や持ち味を活かしながら、個々の生徒の成長を指導していく必要があるが、そのためにはある一定の規模が必要である。
- ・ 大きな集団に入りにくい生徒については、小さな集団の中で個性をしっかりと発揮し、充実した高校生活が送れるような環境を整えることも我々の務めである。
- ・ 一定の大きさがないと学校の様々な機能が果たせない。一方で、分校では小さな学校であるが故にきめ細かな教育ができています。今後の生徒数推移を踏まえると、現在の規模で全校維持することはできないのだから、現在の分校の果たしている機能もどこかに置くことは前提としながら、場合によっては統合・廃止等も必要ではないか。

### ■府立高校と私立高校との関係

- ・ 公立高校と私立高校が共存して、それぞれの建学の精神に合った自由な校風で子どもたちを導いてもらいたい。互いに切磋琢磨してほしい。
- ・ 丹後地域では昔から公立志向が強く、公立しか高校ではないというような地域の中で、地域の唯一の私学として小さいながらも貢献しているということも意識して検討してほしい。

### ■検討スケジュール

- ・ 京丹後市には多くの高校があり、どういう形で地域に説明し、進めていくのかが気がかりである。小・中学校の再編を進めてきた経験上、懇話会を経て6月頃に案をまとめ、8月に方向性を出すには無理があり、乱暴なやり方はいかがかと思う。結論ありきで進めないでほしい。
- ・ 本懇話会は本日初めて開催されたものであり、3回から4回程度の開催で8月末に結論を出すというのは早すぎないか。特に、小・中学生の保護者の方に説明しきれぬのかという気がする。保護者の方にある程度理解をしていただけるように持っていく方法を考えてほしい。

## <参考>

# 府立海洋高校における他府県からの進学状況

### ■入学者選抜にかかる手続き

海洋高校については全国募集を行っているのではなく、「他府県の公立高等学校にない学科を志願する場合」に該当する希望者が、府外居住者が入学志願するための許可申請（特別事情具申）を行い、府教育委員会が許可した場合に限り、受検を認めている。

※例えば。。

水産に関する学科が設置されていない府県

→ 滋賀県、大阪府、奈良県、和歌山県 など

[海洋高校以外の例]

府立田辺高校 自動車科、府立北桑田高校 森林リサーチ科 など

### ■出身中学校の所在地別入学者数

(単位：人)

地域	H27年度	H26年度	H25年度	H24年度	H23年度	合計	
京都府	京都市	12	13	19	20	19	83
	乙訓	1		1	1		3
	山城	10	9	12	6	5	42
	南丹	6	5	1	5		17
	中丹	25	27	25	32	30	139
	丹後	32	31	27	19	35	144
	合計	86	85	85	83	89	428
滋賀県	1	4	3	2	1	11	
大阪府	10	10	8	6	9	43	
兵庫県		1				1	
奈良県	1		2		1	4	
和歌山県					1	1	
その他	2		2			4	
合計	100	100	100	91	101	492	